

病害虫発生予察情報（8月予報）

平成30年7月25日
静岡県病害虫防除所長

1 予報概況

作物名	病害虫名	予報 (8月の県平均平年値)	予報の根拠
イネ	葉いもち・穂いもち	発生量：少 (葉いもち発病株率 1.3%) (穂いもち発病株率 0.5%)	7月上中旬の葉いもち発生量：少(－) 気象予報：気温：高い(－) 降水量：少ない(－)
	紋枯病	発生量：やや少 (発病株率 7.2%)	7月上中旬発生量：少(－) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：少ない(－)
	ごま葉枯病	発生量：やや少 (発病株率 11.3%)	7月上中旬発生量：少(－) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：少ない(－)
	稲こうじ病	発生量：並 (発病株率 0.6%)	昨年8月発生量：多(+) 昨年9月発生量：多(+) 気象予報：気温：高い(－) 降水量：少ない(－)
	斑点米カメムシ類	発生量：やや多	7月上中旬発生量：少(－) 7月の予察灯誘殺数：並～多(+) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：少ない(+)
	コブノメイガ	発生量：やや少 (被害株率 2.6%)	7月上中旬発生量：少(発生なし)(－) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：少ない(+)
	イチモンジセセリ (イネツトムシ)	発生量：やや少 (25株あたり寄生数 0.6頭)	7月上中旬発生量：少(発生なし)(－) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：少ない(+)
サツマイモ	ナカジロシタバ	発生量：やや少 (寄生虫数 0.4頭/m ²)	7月上旬発生量：少(発生なし)(－) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：少ない(±)
	イモキバガ (イモコガ)	発生量：多 (巻葉数 16.1葉/m ²)	7月上旬発生量：多(+) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：少ない(+)
	エビガラスズメ	発生量：並 (寄生虫数 0.00頭/m ²)	7月上旬発生量：少(発生なし)(－) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：少ない(±)
チャ	炭疽病	発生量：やや少 (病葉数 20.6葉/1.25m ²)	7月中旬発生量：並(±) 気象予報：気温：高い(－) 降水量：少ない(－)
	輪斑病	発生量：多 (病葉数 1.9葉/1.25m ²)	7月中旬発生量：多(+) 気象予報：気温：高い(+)

作物名	病害虫名	予報 (8月の県平均平年値)	予報の根拠
チャ	新梢枯死症	発生量：多 (発症枝数 7.4 枝/1.25m ²)	7月中旬発生量：4.6 枝/1.25m ² (平年値なし) 気象予報：気温：高い(+)
	チャハマキ	発生量：やや少 (寄生虫数 1.8 頭/1.25m ²) 発生時期：やや早い	7月中旬発生量：少(-) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：少ない(±)
	チャノコカクモン ハマキ	発生量：やや少 (寄生虫数 1.8 頭/1.25m ²) 発生時期：やや早い	7月中旬発生量：少(-) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：少ない(±)
	チャノホソガ	発生量：多 (巻葉数 4.4 葉/1.25 m ²)	7月中旬発生量：やや多(+) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：少ない(+)
	チャノキイロ アザミウマ	発生量：やや多 (叩き落とし虫数 18.2 頭/4 カ所)	7月中旬発生量：並(±) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：少ない(+)
	チャノミドリヒメ ヨコバイ	発生量：多 (叩き落とし虫数 1.7 頭/4 カ所)	7月中旬発生量：やや多(+) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：少ない(+)
	ヨモギエダシャク	発生量：多 (叩き落とし虫数 0.1 頭/4 カ所)	7月中旬発生量：多(+) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：少ない(±)
ウンシュウ ミカン	黒点病	発生量：少 (発病度 0.4)	7月中旬発生量：少(-) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：少ない(-)
	ミカンハダニ	発生量：少 (寄生葉率9.2%)	7月中旬発生量：少(-) 気象予報：気温：高い(-) 降水量：少(+)
	チャノキイロ アザミウマ	発生量：多 (寄生果率0.1%)	7月中旬発生量：やや多(+) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：少(+)
中晩柑類	かいよう病	発生量：少 (発病度(果) 0.4)	7月中旬発生量：少(-) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：少ない(-)
ナシ	ハダニ類	発生量：少	7月上旬発生量：少(-) 気象予報：気温：高い(-) 降水量：少(+)
	ナシヒメシンクイ	発生量：多	7月上旬発生量：やや多(+) フェロモン誘殺数：多(+) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：少(+)
カキ	フジコナ カイガラムシ	発生量：並 (寄生果率2.1%)	7月中旬発生量：やや少(-) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：少(+)
	ハマキムシ類	発生量：やや多	7月中旬発生量：並(±) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：少(+)

作物名	病害虫名	予報 (8月の県平均平年値)	予報の根拠
果樹全般	カメムシ類	発生量：やや少	7月中旬誘殺数：少(-) ヒノキ毬果吸汁痕数：多(+) 気象予報：気温：高い(+)
キク (施設)	白さび病	発生量：少	7月中旬発生量：少(発生なし)(-) 気象予報：気温：高い(-) 降水量：少ない(-)
	黒斑・褐斑病	発生量：少	7月中旬発生量：少(発生なし)(-) 気象予報：気温：高い(-) 降水量：少ない(-)
	えそ病 (トマト黄化えそウイルス：TSWV)	発生量：並	7月中旬発生量 えそ病：少(発生なし)(-) アザミウマ類：並(±) 気象予報：気温：高い(+)
	アザミウマ類	発生量：やや多	7月中旬発生量：並(±) 気象予報：気温：高い(+)
キク (露地)	カスミカメムシ類	発生量：多 (寄生株率1.7%)	7月中旬発生量：多(+) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：少ない(+)
作物全般	ハスモンヨトウ	発生量：並	フェロモン誘殺数：並～少(-) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：少(+)
	オオタバコガ	発生量：やや多	7月の成虫誘殺数：並～多(+) 気象予報：気温：高い(+) 降水量：少ない(+)

表の見方について

- ・ 予報の発生量は平年(静岡県のごく過去10年間)との比較で、「少、やや少、平年並、やや多、多」の5段階で示しています。
- ・ 予報の発生時期は、時期の予想ができる病害虫に限り、平年(静岡県のごく過去10年間)との比較で、「早、やや早、平年並、やや遅、遅」の5段階で示しています。
- ・ 予報の根拠には、巡回調査に基づく発生状況(調査時期と発生量)、気象庁の1ヶ月予報(気温と降水量)を記入しています。その状況が多発要因の場合は(+)、少発要因の場合は(-)を示し、+-を総合的に判断して発生時期、発生量を予想しています。

農薬情報
はこちら
で検索!



静岡県農薬安全使用指針
・農作物病害虫防除基準

<http://www.s-boujo.jp/>

2 予報の根拠と防除対策

【イネ】

<生育の概況等>

巡回時の生育調査（下表、調査期間：7月9日～19日）の結果、草丈は平年よりやや低く、茎数および葉色は平年並であった。病虫害防除員からのアンケート調査によれば、生育は地域によってばらつきがあるが、平年並～早い傾向にある。

7月上中旬のイネ生育調査結果

	田方 平坦地	東部 高冷地	志太榛原	中遠・西部 (普通期)	中遠 (早期)
草丈 (cm)	53.6 (58.3)	67.2 (71.3)	67.2 (66.1)	51.8 (67.2)	72.7 (84.5)
茎数 (本)	24.4 (24.5)	25.4 (22.5)	24.2 (23.5)	20.2 (22.8)	26.7 (22.9)
葉色 (指数1-7)	4.3 (4.6)	4.3 (4.3)	4.2 (4.2)	3.9 (4.3)	4.0 (4.3)

()内は平年

●葉いもち・穂いもち

予報の根拠

- ・7月上中旬の巡回調査では、葉いもちの平均発病株率は0.08%（平年2.1%）と平年より発生が少なかった。
- ・1ヶ月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年より少ないため、本病の発生を助長しない（感染好適条件：気温15℃～25℃、葉面湿潤時間10時間以上、前5日間の平均気温が20℃～25℃を全て満たす時。）。

防除対策

- ・育苗箱処理剤の残効は出穂期頃までなので、効果の切れた時期以降で、本病の発生に適した曇雨天で日照不足が続く場合は注意が必要である。
- ・上位1～3葉に病斑が見られる場合は、適期（穂ばらみ期～穂ぞろい期）に必ず防除を実施する。特に、急性型病斑（病斑周辺部に褐色部分が少なく、病斑が暗緑色あるいはねずみ色）が多いときには、速やかに薬剤散布をする。
- ・常発地では薬剤の予防散布を行う。
- ・本県ではMBI-D剤（「ウィン」、「デラウス」または「アチーブ」を含む剤）耐性いもち病菌が発生している。また、近年、他県ではQoI剤（「アミスター」または「嵐」を含む剤）耐性いもち病菌が発生し問題となっており、本県でも発生が懸念されるため、耐性菌の発生リスクが高い薬剤を使用する場合は、連用を避けるなど適切に使用する（詳細は県病虫害防除基準の「殺菌剤耐性菌に関する各種資料について」の項を参照）。

●紋枯病

予報の根拠

- ・7月上中旬の巡回調査では、平均発病株率は0.08%（平年1.0%）と平年より少なかった。
- ・1ヶ月予報では、降水量は平年より少ないが、気温は平年より高いため、本病の発生をやや助長する（病原菌は生育適温28～32℃と高温を好む）。

防除対策

- ・水田等で越冬した菌核が一次伝染源となるため、前年発生がみられたほ場では発生しやすい。そのようなほ場では発生に注意し、発生が見られた場合はすみやかに薬剤防除を行う。
- ・病斑が上位葉鞘まで上がると減収の要因になる。特に過繁茂となっているほ場では多発しやすいため、そのようなほ場では今後の発生に注意する。

●ごま葉枯病

予報の根拠

- ・7月上中旬の巡回調査では、平均発病株率は0.4%（平年2.4%）と平年より少なかった。
- ・出穂期以降登熟期までの高温は、イネの老化と病原菌の活動を促すため、本病の発生が多くなる（病原菌の生育適温：25～30℃）。1ヶ月予報では、降水量は平年より少ないが、気温は平年より高いため、本病の発生をやや助長する。

防除対策

- ・肥料切れにより発生が助長されるため、穂肥を適切に施用する。
- ・出穂期以降に高温・多湿が続いた場合には、葉の斑点のみならず穂枯れを起こすので、葉に病斑が見られる場合は穂ばらみ期～穂ぞろい期にかけて薬剤散布を行う。

●稲こうじ病

予報の根拠

- ・昨年8月の巡回調査では、平均発病株率は1.3%（平年0.5%）と平年より多い発生であった。昨年9月の巡回調査においても、平均発病株率は4.0%（平年1.7%）と平年より多い発生であった。東部高冷地や田方平坦地で発生が見られた。
- ・穂ばらみ期頃の低温・多雨により発生が助長される。1ヶ月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年より少ないため、本病の発生をあまり助長しない。
- ・しかし、本病は収穫時に落下した病粒に含まれる多量の厚壁胞子が土壌中に残り、翌年の伝染源となる。このため、常発ほ場では注意が必要である。

防除対策

- ・本病の薬剤防除は予防散布が基本であり、適期は穂ばらみ期頃である。
- ・常発ほ場では、次年以降も適期に薬剤防除を実施する。

●斑点米カメムシ類（アカスジカスミカメ、アカヒゲホソミドリカスミカメ等）

予報の根拠

- ・7月上中旬の水田周辺における雑草のすくい取り調査では、県平均捕獲数は13.8頭/30回振り（平成21.1頭/30回振り）と平成より少ない発生であり、全調査地点中52%（平成72%）の調査地点から斑点米カメムシ類が捕獲された。
- ・周辺雑草から捕獲したカメムシ類のうち、アカスジカスミカメが全捕獲数の83%、アカヒゲホソミドリカスミカメが同15%を占めた。その他、ホソハリカメムシ、シラホシカメムシなどが捕獲された。
- ・7月第3半旬時点の県内4ヶ所の予察灯では、アカスジカスミカメとアカヒゲホソミドリカスミカメの誘殺数は平成並〜多く推移している。
- ・1か月予報では、気温は平成より高く、降水量は平成より少ないため、本虫の増殖を助長する。

防除対策

- ・斑点米カメムシ類はイネ科やカヤツリグサ科雑草の種子で増殖するため、水田周囲の雑草を除草する。ただし、水稲の出穂間際の除草はカメムシ類の本田侵入を助長する可能性があるため、出穂10日前までに除草を終了する。
- ・出穂後は水田内のカメムシ類の発生に注意し、確認された場合は薬剤防除を実施する。特に出穂期が周辺より早い水田はカメムシ類が集中するため、注意を要する。
- ・穂揃期（成虫侵入期）とその7～10日後（幼虫ふ化期）の2回薬剤散布を行うと効果が高い。
- ・粒剤は出穂期に散布する。
- ・農林水産省の蜜蜂被害事例調査により、「蜜蜂被害は、水稲のカメムシを防除する時期に多く、水稲のカメムシ防除に使用した殺虫剤（農薬）を直接浴びたことが原因である可能性が高い」ことが報告されたため、養蜂家との情報を図る等、蜜蜂への影響に留意し防除を行う。なお、詳細は農林水産省ホームページ（http://www.maff.go.jp/j/nouyaku/n_mitubati/honeybee_survey.html）を参照すること。

7月の畦畔・雑草地における斑点米カメムシ類の捕獲頭数（頭/30回振）

	田方平坦地	東部高冷地	志太榛原	中遠・西部 普通期	中遠 早期	県平均
本年度	2.3	0.3	29.5	17.5	19.6	13.8
平成	8.9	2.5	27.1	32.6	34.6	21.1

●コブノメイガ

- ・7月上中旬の巡回調査では本種の被害はみられなかった（平成被害株率1.1%）。
- ・1か月予報では、気温は平成より高く、降水量は平成より少ないため、本種の増殖を助長する。
- ・普通期栽培では出穂前に加害されると登熟歩下が低下するので、8月上～中旬に成幼虫の発生を確認する。上位葉を幼虫が食害している場合は直ちに薬剤を散布する。成虫が確認された場合は5～7日後に薬剤を散布する。

●イチモンジセセリ（イネツトムシ）

- ・7月上中旬の巡回調査では本種の寄生はみられなかった（平年0.05頭/25株）。
- ・普通期栽培で葉色の濃い水田では被害が集中するので、葉巻の発生に注意し、葉巻内に幼虫が見られる場合は薬剤防除を行う。

<その他の病害虫>

●トビイロウンカ

- ・7月中旬の巡回調査では発生は確認されなかった（平年発生なし）。
- ・7月第3半旬時点の県内4ヶ所の予察灯では、トビイロウンカの誘殺は確認されていない。
- ・例年、8月以降に発生量が増加する。8～9月に高温が継続する場合は急増し、9月以降に坪枯れを起こすことがあるため、注意が必要である。
- ・葉色に注意し、水田内の一部が坪状に黄化している場合は株元を観察し、成幼虫の寄生が確認された場合は直ちに薬剤防除を行う。

【サツマイモ】

<生育の概況等>

生育は平年並である。

●ナカジロシタバ

予報の根拠

- ・7月上旬に行った巡回調査では、発生は認められなかった（平年寄生幼虫数0.3頭/m²）。
- ・例年8月に幼虫が増加する。
- ・1ヶ月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年より少ないため、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・幼虫は齢期が進むと葉を食い尽くすので、例年発生するほ場では注意が必要である。
- ・幼虫が多数見られるようであれば直ちに薬剤防除を行う。

●イモキバガ（イモコガ）

予報の根拠

- ・7月上旬に行った巡回調査では、平均巻葉数は4.4葉/m²（平年2.6葉/m²）と平年に比べ多かった。
- ・1ヶ月予報では、気温は平年より高高く、降水量は平年より少ないため、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・例年、8月は葉の繁茂に伴い巻葉数が増加する。多発生のは場では、被害が拡大する前に防除を行う。

●エビガラスズメ

予報の根拠

- ・7月上旬に行った巡回調査では、発生は認められなかった（平年0.04頭/m²）。但し、防除員からの情報では、平年並の発生となっている。
- ・1か月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年より少ないため、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・中～老齢幼虫は1頭当たりの食害量が多いため、若齢幼虫のうちに防除を行う。

【チャ】

<生育の概況等>

7月中旬の巡回調査時では、二番茶の摘採後に葉をわずかに残す程度に浅刈りを行った茶園が多く、その後の芽の生育も茶園によりばらつきがみられた。また、更新園も多く見られた。

●炭疽病

予報の根拠

- ・7月中旬の巡回調査では、二番茶摘採残葉や遅れ芽で平均14.4葉/1.25㎡(平年12.3葉/1.25㎡)の発生が見られ、平年並であった。ただし、これは一番茶摘採後に摘採や刈り捨てが行われていない2ほ場で多発し平均値を上げているためであり、この2ほ場を除いた平均値は、5.8葉/1.25㎡と平年の約半分の発生量であった。これは本病の発生に必要な、降雨日・曇天日が少なかったためと考えられる。
- ・本病の感染には新芽生育時に10時間以上の濡れが必要である。1ヶ月予報では気温は高く、降水量は少ないため、本病の発生は助長されない(分生子の発芽適温22～27℃)。

防除対策

- ・新芽開葉期に半日以上続く降雨があった場合は、早めに防除を行う。なお、萌芽期～一葉開葉期には予防剤(ダコニール1000、フロンサイドSCなど)を使用する。

●輪斑病

予報の根拠

- ・7月中旬の巡回調査では、二番茶摘採残葉で平均36.8葉/1.25㎡(平年21.2葉/1.25㎡)の発生が見られ、平年よりかなり多かった。これは、本病の発病に必要な高温が続いたこと、摘採後の防除が実施されていないほ場が多いことが原因として考えられる。
- ・本病の発病は25℃以上の高い気温が好適である。1ヶ月予報では気温が高いことから、本病の発生を助長する。

防除対策

- ・摘採や整枝によってできた傷口が発病に必要なため、常発園では、整枝等の作業を行った際には、翌日までに薬剤による防除を行う。

●新梢枯死症

予報の根拠

- ・7月中旬の巡回調査では、平均4.6枝/1.25㎡の発生が認められた(7月の平年値なし)。また、茎枯れ症状も多数認められている。しかし、本症状の原因として輪斑病菌が関与しているものは半数程度であることが判明しており、残りは多雨による水腐れや高温等による生理的な要因と考えられる。今年の発生は高温の継続が関与している可能性が高いと考えている。
- ・1ヶ月予報では気温が高いため、本症の発生を助長する。

防除対策

- ・高温等の生理的な要因による発生を予防するため、少雨が続く場合にはかん水による干ばつ害の予防を励行する。
- ・三番茶を摘採しない園では、三番茶芽の萌芽期から生育期に、三番茶を摘採する園では、秋芽の萌芽期から生育期に、2回程度薬剤を散布する。なお、QoI 剤（商品名：アミスター20フロアブル、ストロビーフロアブル、フリントフロアブル 25、ファンタジスタ顆粒水和剤）は、耐性菌が発生しやすいので同一薬剤として扱い、連用を避ける。

●チャハマキ、チャノココクモンハマキ

予報の根拠

- ・7月中旬の巡回調査では、平均寄生虫数はチャハマキが0.3頭/1.25 m²（平年2.3頭/1.25 m²）、チャノココクモンハマキが0.1頭/1.25 m²（平年1.6頭/1.25 m²）で、両種ともに平年に比べ少発生であった。
- ・1ヶ月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年より少ないため、本種の発生をやや助長する。
- ・本年は3月以降の平均気温が平年を上回ったことから越冬世代、および第1世代成虫発生時期がやや早まった。このため、第2世代成虫発生盛期は平年よりやや早い7月下旬から8月上旬で、第3世代幼虫を対象とした防除時期は8月上旬から中旬になると予想される。

防除対策

- ・地域の予察灯やフェロモントラップでの成虫の誘殺状況に注意して適期防除を行う。なお成虫の誘殺数データは防除所ホームページで提供している。

●チャノホソガ

予報の根拠

- ・7月中旬の巡回調査では、平均巻葉数は1.7葉/1.25 m²（平年1.5葉/1.25 m²）で、平年に比べやや多かった。
- ・1ヶ月予報では、降水量は平年より少ないが、気温は平年より高く、本種の発生は高温により抑制されるため助長されない。

防除対策

- ・新芽生育期と成虫発生期が合致すると発生が多くなる。
- ・二番茶後に浅刈りした茶園が多く、そのような茶園では新芽の生育時期が例年とは異なる。そのため、地域の予察灯やフェロモントラップにおける誘殺虫数の推移に注意し、成虫の発生盛期と新芽の生育時期が合致する場合は、新芽への産卵状況に注意し、適期防除に努める。なお成虫の誘殺数データは防除所ホームページで提供している。

●チャノキイロアザミウマ

予報の根拠

- ・7月中旬の巡回調査では、平均叩き落とし虫数は14.3頭/4カ所（平年13.3頭/4カ所）と平年並だった。
- ・1ヶ月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年より少ないため、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・例年、8月の新芽生育期は発生が増加するので、新芽の萌芽から開葉期に防除を実施する。また、二番茶摘採後に浅刈りした茶園では、新芽の生育時期が通常の花園とは異なるので、新芽の生育状況に注意し、新芽萌芽から生育期に防除を実施する。

●チャノミドリヒメヨコバイ

予報の根拠

- ・7月中旬の巡回調査では、平均叩き落とし虫数は3.2頭/4カ所（平年2.7頭/4カ所）と平年よりやや多かった。
- ・1ヶ月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年より少ないため、本種の発生を助長する。

防除対策

- ・例年、8月の新芽生育期は発生が増加するので、新芽の開葉期に防除を実施する。また、二番茶摘採後に浅刈りした茶園では、新芽の生育時期が通常の花園とは異なるので、新芽の生育状況に注意し、新芽開葉期に防除を実施する。

●ヨモギエダシャク

予報の根拠

- ・7月中旬の巡回調査では、平均叩き落とし虫数は0.2頭/4カ所（平年0.09頭/4カ所）と平年より多かった。
- ・1ヶ月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年並より少ないため、本種の発生をやや助長する。

防除対策

- ・平年では、8月後半になると予察灯への成虫誘殺数が増加する。茶園内をよく観察し、薬剤感受性の高い若齢幼虫の時期に防除を行う。

<その他の病害虫>

●カンザワハダニ

- ・7月中旬の巡回調査では、摘採面における平均寄生葉率は0.5%（平年0.1%）と平年よりも高かった。
- ・1ヶ月予報では、降水量は平年より少ないため、今後の発生に注意する。
- ・例年、8月は特に防除の必要はないが、被害が目立つ場合には早めに防除する。

●チャノホコリダニ

- ・8月に降雨が少なく乾燥が続くと、8月中旬から9月にかけて秋芽に発生する。1ヶ月予報では、降水量は平年より少ないため、過去に発生の見られた茶園では本種の発生に注意する。
- ・秋芽をよく観察し、発生を確認したら早めに防除を行う。

●チャトゲコナジラミ

- ・7月中旬の巡回調査では、成虫の発生はほぼ終息し、1～2齢幼虫が中心の花園が多かった。
- ・本年は成虫の発生時期が平年より早く、次世代の成虫の発生盛期は8月中～下旬と考えられる。
- ・幼虫は裾部の葉裏に多く生息するので、防除の前に裾刈りを行い、幼虫の寄生している葉を枯らす（幼虫は移動できないため、寄生した葉が枯れると死亡する）。その後に薬剤散布を行うと、薬液が茶株の内側まで十分に付着し防除効果が高まる。

【ウンシュウミカン】

＜生育の概況等＞

主要産地における生育は平年より7～10日程度早い。また、着果量はやや多い。

●黒点病

予報の根拠

- ・7月中旬の巡回調査では、果実の発病度は0.11（平年0.16）と平年より少なかった。
- ・本病は風雨によって伝染するため多雨は発生を助長する。1ヶ月予報では気温は平年よりも高いが、降水量は平年よりも少ないため、本病の発生を特には助長しない。

防除対策

- ・薬剤散布は前回の散布日から25～30日または累積降雨量が250～300mmを目安にして防除を行う。
- ・アメダスの気象データを用いたシミュレーションによれば、気象が今後平年並みに推移した場合、7月上旬に防除を行った園では8月中旬～9月上旬が、7月中旬に防除を行った園では9月上旬～下旬が、7月下旬に防除を行った園では9月上旬～下旬が要防除時期となる（ホームページを参照）。

●ミカンハダニ

予報の根拠

- ・7月中旬の巡回調査における平均寄生葉率は3.8%（平年15.7%）と平年より少ない発生であった。
- ・1ヶ月予報によると降水量は平年より少ないが、気温は平年より高いため本虫の発生を特に助長しない。

防除対策

- ・夏期（7～8月）は天敵（カブリダニ類、ハネカクシ類、テントウムシ類）の発生が多くなるが、ミカンハダニが多発している園（葉あたり3頭を超える園地）では薬剤防除を行う。

●チャノキイロアザミウマ

予報の根拠

- ・7月中旬の巡回調査では、本虫の平均寄生果率は0.5%（平年寄生果率0.1%）と平年より多かった。果梗部の平均被害度は0.8（平年0.8）と平年並み、果頂部の被害は見られなかった（平年0.1）。
- ・1ヶ月予報によると気温は平年より高く、降水量は平年より少ないため本虫の発生を助長する。

防除対策

- ・アメダスの気象データを用いた予測では、今後気温が平年並みで推移した場合、第5世代成虫の発生ピークは8月第1～2半旬、第6世代成虫の発生ピークは8月第4～6半旬と予想される（各地域における成虫発生時期の予想については防除所ホームページを参照）。
- ・薬剤防除適期は各世代の飛来ピーク7日前～当日までである。各地域の発生ピークを参考に防除を行う。
- ・樹冠占有面積率60%以下の園地で、反射率90%以上の光反射シートマルチを全面被覆すれば、薬剤防除と同等の効果がある。

【中晩柑】

●かいよう病

予報の根拠

- ・ 7月中旬の巡回調査では、葉の発病度は0.17（平年0.66）、果実の発病度は0.03（平年0.21）と平年より少なかった。
- ・ 1ヶ月予報では気温は平年よりも高いが、降水量は平年よりも少ないため、本病の発生を特には助長しない。

防除対策

- ・ 本病に対する薬剤散布は、予防散布に重点を置く。発生が見られる園地では感染の拡大を防ぐため降雨前の薬剤散布を行う。
- ・ 台風が襲来すると感染を著しく助長し、それ以前の発生量が少ない場合でも多発する恐れがある。降雨後に散布しても、すでに感染した組織内の病原菌にはほとんど効果はないので、気象情報とほ場の発生状況に注意して降雨前の予防散布を行う。

【ナシ】

<生育の概況等>

主要産地における生育は平年より5～7日程度早い。また果実肥大は平年並～やや早い。

●ハダニ類

予報の根拠

- ・ 7月上旬の巡回調査では平均寄生葉率は0.8%（平年3.3%）で平年より少ない発生だった。
- ・ 1ヶ月予報によると降水量は平年より少ないが、気温は平年より高いため本虫の発生を特に助長しない。

防除対策

- ・ 発生園では収穫前日数に注意して防除を行う。
- ・ 葉当たり雌成虫密度1～2頭（寄生葉率20～40%）が防除の目安である。この時期は増殖が速いので園内の発生状況をよく観察する。

●ナシヒメシンクイ

予報の根拠

- ・ 7月上旬の巡回調査では被害果率は0.2%（平年0.0%）と平年よりやや多い発生であった。
- ・ 浜松市のフェロモントラップの誘殺数は平年に比べて多く推移している。
- ・ 1ヶ月予報によると気温は平年並より高く、降水量は平年より少ないため本虫の発生を助長する。

防除対策

- ・ 成虫の発生は8月上旬～中旬にかけて多くなると予想されるので、無袋栽培園では収穫時期に注意し、防除を行う（誘殺データは防除所ホームページを参照）。

【カキ】

＜生育の概況等＞

主要産地における生育は平年より5～7日程度早い。また、着果量はやや多い。

●フジコナカイガラムシ

予報の根拠

- ・7月中旬の巡回調査では平均寄生果率は0.9%（平年1.2%）で平年よりやや少ない発生だった。
- ・1ヶ月予報によると気温は平年より高く、降水量は平年より少ないため本虫の発生を助長する。

防除対策

- ・近年、発生が増加傾向にあることから、発生がみられるほ場では直ちに防除する。本種は果実とヘタの間の薬剤が届きにくい所に寄生しているので散布を丁寧に行う。

●ハマキムシ類（チャハマキ、チャノコカクモンハマキ）

予報の根拠

- ・7月中旬の巡回調査では平均被害葉率は1.5%で（平年被害葉率1.5%）で平年並みの発生であった。
- ・1ヶ月予報によると気温は平年より高く、降水量は平年より少ないため本虫の発生を助長する。

防除対策

- ・両種の第2世代成虫発生時期は8月上旬～中旬まで、発生時期が長くなることが多い。地域の予察灯やフェロモントラップでの成虫の誘殺状況に注意し適期に防除する。（誘殺データは防除所ホームページを参照）

【果樹全般】

●カメムシ類（チャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシ、クサギカメムシ）

予報の根拠

- ・7月第1～4半旬の予察灯における7月の合計誘殺数の平均は、チャバネアオカメムシは県全体で88.5頭/箇所（平年282.7頭/箇所）、ツヤアオカメムシは28.0頭/箇所（平年33.9頭/箇所）と平年より少なかった。県内6カ所のフェロモントラップにおける7月第1～4半旬の合計誘殺数の平均は、チャバネアオカメムシが110.2頭/箇所（平年589.6頭）と平年より少ない発生であった
- ・7月中旬のスギ、ヒノキにおけるカメムシ類の平均寄生数は10結果枝あたり3.3頭（平年1.0頭）と平年より多かった。山間部ではカメムシ類の発生が多いため、果樹園への飛来に注意する。
- ・7月中旬のスギ・ヒノキの結果量調査は本年の平均結果量指数4.7（平年3.9毬果）と平年よりやや多かった。また、ヒノキの毬果の吸汁痕数は平均2.7本（平年1.1本）と平年より多かった。

防除対策

- ・フェロモントラップ及び予察灯による誘殺数は、防除所ホームページを参照する。
- ・スギ・ヒノキ林付近の果樹園では飛来しやすいため、ほ場の発生状況をよく観察し、発生が見られれば防除を行う。

【キク（施設）】

<生育の概況等>

生育は平年並である。

●白さび病

予報の根拠

- ・ 7月中旬の巡回調査では、発生は確認されなかった。
- ・ 1ヶ月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年より少ないため、本病の発生を特には助長しない（本病の発病適温 17℃前後）。

防除対策

- ・ 8月の高温は本病原菌の生育に適さないが、この時期に初期防除を怠ると、発病に好適な条件となる秋以降の防除が困難となるので、発生ほ場では初期防除に努める。
- ・ 発生ほ場、特に罹病性品種を中心に薬剤散布を行う。ただし、薬剤によっては薬害が出やすいので、新しい品種では小規模の試し散布を行う。
- ・ 発病葉は感染源となるため速やかに摘み取り、ほ場外に持ち出して処分する。

●黒斑病、褐斑病

予報の根拠

- ・ 7月中旬の巡回調査では、発生は確認されなかった。
- ・ 1ヶ月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年より少ないため、本病の発生を特には助長しない（生育適温：黒斑病 24～28℃、褐斑病 20～28℃）。

防除対策

- ・ 本病は潜伏期間が長く発病後の防除では手遅れとなるので、薬剤の予防散布を行う。
- ・ 多雨や高湿で発生が助長されるため、長雨が続く場合には発生に注意する。
- ・ 発病葉は感染源となるため速やかに摘み取り、ほ場外に持ち出して処分する。

●えそ病（トマト黄化えそウイルス：TSWV）

予報の根拠

- ・ 7月中旬の巡回調査では、発生は確認されなかった。媒介虫であるアザミウマ類の被害株率は28.0%であった（平年値なし）。ただし、病害虫防除員の情報では多発しているほ場もあるため注意を要する。
- ・ 1ヶ月予報では、気温は平年より高く、降水量は平より少ないため、アザミウマ類の増殖を助長する。

防除対策

- ・ 発病株は伝染源となるため速やかに抜き取り、土中に埋めるかビニール袋に入れて腐らせるなどして適切に処分する。
- ・ ミカンキイロアザミウマやネギアザミウマなどのアザミウマ類は本ウイルスを媒介するため、食害が認められる場合には速やかに薬剤散布を実施する。

●アザミウマ類（クロゲハナアザミウマ、ミカンキイロアザミウマ）

予報の根拠

- ・ 7月中旬の巡回調査では、平均被害株率は28.0%であった（平年値なし）。
- ・ 1ヶ月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年より少ないため、アザミウマ類の増殖を助長する。

防除対策

- ・ えそ病が認められた場合は被害株を速やかに抜取り処分するとともに、アザミウマ類の薬剤防除を徹底する。
- ・ 開花期のキクは特にミカンキイロアザミウマの被害を受けやすいため、蕾の膜割れ時から発生に注意する。

【キク（露地）】

<生育の概況等>

生育は平年並である。

●カスミカメムシ類

予報の根拠

- ・ 7月中旬の巡回調査では、平均被害株率は3.3%であった（平年1.1%）。
- ・ 1ヶ月予報では、気温は平年より高く、降水量は平年より少ないため、カスミカメムシ類の増殖を助長する。

防除対策

- ・ 成幼虫が、口針を新芽、蕾などに挿入して吸汁加害し、葉や花の奇形を引き起こすため、多発した場合は薬剤防除を実施する。

【イチゴ】

<その他の病害虫>

●炭疽病

- ・ 本病は比較的高温を好み、胞子が頭上灌水や雨滴の跳ね上がりにより飛散することから、高温・多湿条件下で多発する。一度発病してしまうと防除が困難なため、苗場では定期的な予防散布に努める。
- ・ 発病株は見つけ次第抜き取り、ほ場外に持ち出し処分する。移植時には感染苗を本ほへ持ちこまないように十分注意する。

●うどんこ病

- ・ 育苗中の防除を徹底する。また、現在、発病が見られないほ場も予防的に薬剤散布を行い、本ほへ持ちこまないようにする。

●コガネムシ類

- ・磐田市における予察調査によると、ドウガネブイブイは平年より少なく、アオドウガネが平年並みで推移していた。
- ・発生がみられるほ場では、育苗期、定植時に薬剤散布を行う。定植時には根への幼虫の寄生に注意し、本ぼへ幼虫を持ち込まないように注意する。

●ハダニ類

- ・1ヶ月予報によると気温は平年より高いため、発生がみられる苗場がある。
- ・発生がみられるほ場では、育苗期、定植時に薬剤散布を行う。定植前に葉の寄生に注意し、本ぼへ持ち込まないように注意する。

【作物全般】

●ハスモンヨトウ

予報の根拠

- ・フェロモントラップの調査によると静岡市における誘殺数は平年並だが、磐田市および御前崎市は平年よりも少なく推移していた。
- ・1ヶ月予報では気温は平年よりも高く、降水量は平年より少ないため本種の増殖を助長する。

防除対策

- ・初期発生に注意し若齢のうちに防除を行う。施設栽培では施設の開口部に防虫網を設置し侵入を防ぐ。
なお、成虫の誘殺数データは防除所ホームページで提供している。

●オオタバコガ

予報の根拠

- ・浜松市のキク産地におけるフェロモントラップの誘殺数は平年より多く推移している。磐田市のフェロモントラップの誘殺数は平年並で推移している。
- ・1ヶ月予報では、気温は平年よりも高く、降水量は平年より少ないため、本種の増殖を助長する。

防除対策

- ・例年8～9月は発生が増加するため、芽における被害の発生に注意し、初期防除に努める。

3. 季節予報

(1) 1 か月予報 (東海地方 平成 30 年 7 月 23 日 名古屋地方気象台発表)

【予報期間】 7 月 22 日から 8 月 21 日

【予想される向こう1か月の天候】

向こう 1 か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。平年に比べ晴れの日が多いでしょう。

向こう 1 か月の平均気温は、高い確率 70% です。日照時間は、平年並または多い確率ともに 40% です。週別の気温は、1 週目は、高い確率 80% です。2 週目は、高い確率 60% です。3～4 週目は、平年並または高い確率ともに 40% です。

【確 率】

期間	要素	低・少	平年並	高・多%
1 か月	気温	10	20	70
1 か月	降水量	40	30	30
1 か月	日照時間	20	40	40
1 週目	気温	10	10	80
2 週目	気温	10	30	50
3～4 週目	気温	20	40	40

【予報の対象期間】

1 か月 : 7 月 21 日 (土) ～ 8 月 20 日 (月)

1 週目 : 7 月 21 日 (土) ～ 7 月 27 日 (金)

2 週目 : 7 月 28 日 (土) ～ 8 月 3 日 (金)

3～4 週目 : 8 月 4 日 (土) ～ 8 月 17 日 (金)

(2) 3か月予報 (東海地方 平成30年6月25日 名古屋地方気象台発表)

【予報期間】 7月から9月

【予想される向こう3か月の天候】

向こう3か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。この期間の平均気温は、高い確率50%です。

7月 期間の前半は平年に比べ曇りや雨の日が少なく、後半は平年に比べ晴れの日が多いでしょう。気温は、高い確率50%です。降水量は、平年並または少ない確率ともに40%です。

8月 平年と同様に晴れの日が多いでしょう。気温は、平年並または高い確率ともに40%です。

9月 天気は数日の周期で変わるでしょう。気温は、平年並または高い確率ともに40%です。

【気温】

3か月			7月			8月			9月		
低	並	高	低	並	高	低	並	高	低	並	高
20	30	50	20	30	50	20	40	40	20	40	40

【降水量】

3か月			7月			8月			9月		
少	並	多	少	並	多	少	並	多	少	並	多
30	40	30	40	40	20	30	30	40	30	30	40

【参考資料】

	平均気温 (°C)			降水量 (mm)		
	7月	8月	9月	7月	8月	9月
浜松	25.7	27.0	24.1	190	151	249
静岡	25.7	27.0	24.1	278	251	292
三島	25.6	26.8	23.6	213	209	243

*1981年～2010年の平均 *降水量は小数点以下を四捨五入しています。

※ 利用上の注意

- ・気温・降水量は「低い(少ない)」「平年並」「高い(多い)」の3つの階級で予報します。階級の幅は、1981～2010年の30年間における各階級の出現率が等分(それぞれ33%)となるように決めてあります。(気候的出現率と呼びます)。
- ・晴れや雨などの天気日数は、平年の日数よりも多い(少ない)場合は「平年に比べて多い(少ない)」、また平年の日数と同程度に多い(少ない)場合には「平年と同様に多い(少ない)」と表現します。なお、単に多い(少ない)と表現した場合には対象期間の2分の1より多い(少ない)ことを意味します。

お問い合わせは

静岡県病害虫防除所 〒438-0803 磐田市富丘678-1 TEL 0538-36-1543 FAX 0538-33-0780 URL http://www.agri-exp.pref.shizuoka.jp/boujo/boujo.html
--